

## 『伊勢物語』 異見

今西, 祐一郎  
九州大学文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/11992>

---

出版情報 : 語文研究. 60, pp.1-8, 1985-12-15. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 『伊勢物語』異見

今 西 祐 一 郎

## (一) 築地のくづれ

むかし、をそこありけり。東の五条わたりにいと忍びていきけり。みそかなる所なれば、門よりもえ入らで、わらはべの踏みあけたる築地のくづれより通ひけり。

『伊勢物語』五段、傍点の箇所は、古来草かりわらはべなどの道にしたる心也。

〔愚見抄〕

つきひぢのやうくづれたる所を、わらはべどもあそぶとて、たびくふみこゆるゆゑにいとくづれて道のあきたるをたよりに此をのこのかよふ也。

〔伊勢物語新釈〕

といった具合に説かれて今日に至る。たしかに、右のような意味での「わらはべの踏みあけたる築地のくづれ」は、たとえは

律は西東の御門を閉ぢこめたるぞたのもしけれど、くづれがちなるめぐりの垣を馬牛などの踏みならしたる、道にて、春夏になれば、放ち飼ふ総角の心さへぞめざましき。

と述べる『源氏物語』蓬生巻の一節からも容易にうかがうことができる。また、「わらはべの踏みあけたる」ものにかぎらず、「築地のくづれ」とはめずらしいものではなく、むしろありふれた日常的な風景であつたにちがいない。

さてこの男、その年の秋、西の京極九条のほどに行きけり。そのあたりに、築地など崩れたるが、さすがに葎など上げて、簾かけわたしてある人の家あり。簾のもとに、女どもあまた見えければ、この男、ただにも過ぎで、などかその庭は心すごげに荒れたるなどいひ入れたれば、「誰そ、かういふは」なぞ問ひければ、「なほ道行く人ぞ」といひ入る。築地の崩れより見出し、この女……。

〔平中物語』三十六段〕

今昔、駿河前司橋季通ト云人有キ。其人若カリケル時、参仕マツル所ニモ非ヌ止事無キ処ニ有ケル女房ヲ語テ、忍テ通ケルヲ、其所ニ有ケル侍共、生々六位ナドノ有リケルガ、「此ノ殿ノ人ニモ非ヌ者ノ、宵暁ニ殿内ヨリ出入スル、極テ無愛也。去来此レ立籠テ罰ム」ト集テ云合セケルヲ、季通然ル事ヲモ不知

シテ、前々ノ如ク小舎人童一人許ヲ具シテ、歩ちヨリ行テ、忍テ局ニ入ケリ。童ヲバ、「曉ニ迎ヘニ来レ」ト云テ、返シ遣リツ。然ル間、此ノ將ムト為ル者共、伺ハムトシケル程ニ、「例ノ主来テ、既ニ局ニ入ヌルハ」ト告廻シテ、此方彼方ノ門共差シテケリ。鎗ヲバ取置テ、侍共皆曳杖シテ、築垣ノ崩ナドノ有ル所ニ立塞ガリテ護リケルヲ……。

〔《今昔物語集》卷一十三、駿河前司橋季通構述語第十〕  
だが、ひるがえって考えてみるに、「築地のくづれ」が、ありふれたものであつたのならば、『伊勢物語』はなぜその「築地のくづれ」に、わざわざ「わらははべの踏みあげたる」などという形容を加えたのであろうか。というのも、古来の解釈に従うかぎり、この形容は、『伊勢物語』五段にとつて、本質的な意味を担うものとは考えられず、無駄な表現を極力省くのを旨とする『伊勢物語』の文章としていささかの違和感をおぼえるからである。現に、五段の歌を同趣の詞書とともに載せる『古今集』卷十三（六三三）が

ひんがしの五条わたりに、人をしりおきてまかりかよひけり。  
忍びなる所なりければ、門よりしもえいらで、垣のくづれよりかよひけるを……。

と、「垣のくづれ」とだけ言つて「わらははべの踏みあげたる」という形容句を欠いているのは、それが歌にとって必ずしも必要とされるものではなかつたからであらう。『伊勢物語』でも塗籠本のみは『古今集』と同じくその形容を欠く本文をもつ。

このように「わらははべの踏みあげたる」という語句を欠くのが原型で、『伊勢物語』において物語の描写としてそれが付加されたのか、または逆にそれを持つのが原型で、『古今集』や塗籠本はそれを

削除したのか、といった原型をめぐる論議には、ここでは立ち入らない。それが原型であるか否かを問わず、塗籠本を除く『伊勢物語』の諸伝本に見える「わらははべの踏みあげたる築地のくづれ」という本文が『伊勢物語』五段にとつて何を意味しているのか、あるいは意味しうるのかを従来の解釈にとられずに考えることに、当面の目的を限定する。

さて、問題の語句は、たんに歌にとつて不可欠なものではないのみならず、すでに触れたように、『伊勢物語』五段の物語にとつても、さして深い意味をもつとは思えないものであつた。それが五段にもたらずのは、「草かり」の従僕（『愚見抄』）や「遊ぶ」子供たち（『伊勢物語新釈』）といった、のどかな背景にとどまるが、しかしそれは『伊勢物語』の「男」の恋という文脈にはほとんどかかわらない。だが、築地を踏みあげたる「わらははべ」とは、草刈りの従僕や遊ぶ子供たちといった、「男」に無縁な不特定の存在としてしか解せないものなのであろうか。

思うに、従来の解釈は「わらははべ」という語の複数性に忠実でありすぎたのではないか。たしかに「わらははべ」の用例の多くは複数の「わらははべ」を意味している。しかし、他方、『伊勢物語』にも、  
むかし、をとこ、狩の使より帰りきけるに、大淀のわたりに宿りて、斎宮のわらははべにいひかけける。  
(七十段)

とあるような、単数に解し得る「わらははべ」も見出される（北山谿太『源氏物語辞典』）。これに倣つて、五段の「わらははべ」を「男」に無関係な、不特定多数の「わらははべ」ではなく、一人の「わらははべ」と考えてみれば、どうなるか。この想定は、本文批判の立場からも可能性が見出されなくはない。わずか一本ではあるが『伊勢物語』に

就きての研究』校本篇によれば、古本系最福寺本に「わらは」の形が見られるからである。とすれば、そのとき「わらは」への踏みあけたる築地のくづれ」には、従来とはまったく別な解釈の可能性が生まれてくるであろう。

平安朝貴族の恋とは、ただ男女二人だけの間に成り立つものではなかった。伊勢物語絵、たとえば大英図書館蔵『伊勢物語図絵』や嵯峨本の、初、十四、二十九段などの絵に、なぜ『伊勢物語』本文には見えない「わらは」が一人描かれているのか。それは、物語に表立って登場することこそむしろ少ないが、恋する男にとって「わらは」とは常にその恋における同伴者にほかならなかったからである。<sup>2)</sup>光源氏は素性を隠して夕顔のもとへ通うときにも

人に知らせ給はぬままに、かの夕顔のしるべせし隨身ばかり、さては顔むげに知るまじきわらは、一人ばかりぞ、率ておはしける。

と、「わらは」を手放さないし、また、先に引いた『今昔物語集』の主人公橘季通も「前々ノ如ク小舎人童一人許ヨリ具シテ、歩ヨリ行テ、忍テ局ニ入」っていったのであった。中でも、このような「わらは」の実態にくわしく触れているのは『和泉式部日記』であろう。この作品では

ゆめよりもはかなき世のなかをなげきわびつゝ、あかしくらすほどに四月十余日にもなりぬれば、木のしたくらがりもてゆく。

築土のうへの草あをやかなるも、人はことにめもとゞめぬをあらはれとながむるほどに、ちかき透垣のもとに人のけはひすれば、たれならんとおもふほどに、故宮にさぶらひし小舎人童なりけり。

という冒頭から敦道親王の「わらは」が登場して、和泉式部この往き来の重要な役割をしばしば担っている。

九月廿日あまりばかりのありあけの月に御めさまして、いみじうひさしうもなりにけるかな、あはれこの月はみるらんかし、人やあるらんとおぼせど、れいのわらはばかりを御ともにておはしましてかどをたゝかせ給ふに……。

『伊勢物語』五段のような恋物語に「わらは」が登場するとすれば、その役割でまず考えられるのは、右に見たような男の恋の手先としてのそれではないだろうか。五段の「わらははべ」をそのような存在として考えるならば、「わらははべの踏みあけたる築地のくづれ」とは、「男」とは無関係な子供たちによって踏み破られていた築地の崩れではなく、「男」の従者である「わらははべ」が主人たる「男」のために「踏みあけた」築地の崩れということになる。許されぬ女のもとへ通う男にとって、築地とは、たとえ「くづれ」がなくとも必要とあらば踏み越えねばならないものであった。

又、この男、親近江なる人に、いとしのびて住みにけり。さるあひだにこの女の親、気色をや見けむ、口舌ち、守り、いさかひて、日も少し暮るれば門鎖しうかがひければ、女は思ひ障り、男逢ふよしもなく、からうじて築地を越えて、この男入りにけり。常にもいひ伝へさする人に、たまさかに会ひにけり。さてそれして、「築地を越えてなむ参り来つる」といはずけるを……。

〔平中物語〕二十四段

「密なる所」に「忍びて」通う『伊勢物語』の「男」の立場もまた然り。ただし彼は忠実な「わらは」に築地を少々毀たせ、「わが通路」を設けて通っていったのである。恋の通路のために築地を崩

すというのはいささか荒っぽいしわざに思えるが、しかし、『勢語臆断』が指摘する『源氏物語』浮舟巻の一節を読めば、それはさほど異とすることでもあるまい。

いそぎて宵すぐる程におはしましぬ。内記案内よく知れるかの殿の人に問ひ聞きたりければ、宿直人あるかたには寄らで葦垣し籠めたる西面をやをらすこし、毀ちて入りぬ。われもさすがにまだ見ぬ御住ひなれば、たどたどしけれど、人繁うなどしあらねば、寝殿の南面にぞ、火ほの暗う見えて、そよそよとする音する。参りて、「まだ人は起きて侍るべし。ただこれよりおはしまさむ」としるべして入れたてまつる。

薫の嚴重な警戒のもとにある浮舟に会いにゆく匂宮は、腹心の従者内記が破った葦垣の崩れから、首尾よく邸内に潜入したのである。

なお、古来の解釈は「築地のくづれ」を、『枕草子』にいう「人にあなづらるるもの」、すなわち邸の荒廢の象徴と見なすものであったといえる。だが、そうであれば、「東の五条」という藤原氏の大邸宅にそれはなほだ似合わぬ風景ということにならう。「此時の権威・富貴を極めたる人の姫君住せたまふあたりに、築地の崩れをさておくべきかは」(賀茂真淵『伊勢物語古意』)。こうした観点から五段末尾の「二条の后に忍びてまいりけるを、世の聞えありければ、兄人たちのまもらせ給ひけるとぞ」という、いわゆる「後人注」を否定し、本来業平と二条後の事蹟にはかかわらぬ物語として五段を讀むという傾向が今日の一般である。しかし、前述のごとく考えらるならば、「わらは」に築地を「踏みあげ」させるという大胆にしてかつ情熱的な行動は、二条后という許されぬ相手のもとへ忍び込む手

段として、まことにふさわしいものとなるはずである。

## (二) うばらからたち

さてのち、をとこ見えざりければ、女、をとこの家にいきてかいまみけるを、をとこほのかに見て、

百年に一年たらぬつくも髪我を恋ふらし面影に見ゆとて、出でたつ気色を見て、うばらからたちにかゝりて、家に来てうちふせり。

六十三段、右傍点部は古來次のように解されてきた。

むばらは茨也。からたちは棘也。此女おとこのほかへいづるに見あはじとてあはてゝにぐれば、道もなき方へ行て、むばらからたちにかゝりりといふなり。 (『愚見抄』)

さて馬にくらおかせてといひ、うばらからたちの事いへるを思へば、男の家よりおうなのもとへゆくには野路を遠くゆくなりけり。かく遠ければおうなのはやく帰らんとて野路のまゝにありかず、荆棘のあるをもしらず身をわすれて野をはしりまどひてかへる也。 (『伊勢物語新釈』)

『伊勢物語新釈』の解は、塗籠本の本文

(歌)といひて、むまにくらをかして、いでたつけしきをみて、むばらからたちともしらず、はしりまどひて、家にきてふせり。によるものだが、塗籠本の本文に従えば従来の解釈に異議を唱えることは一段と困難に感じられる。「うばらからたち」が洛中の道に生えて人の往来を妨げるようなものでないことは当然であろう。

…思ヒ不懸ズ山ニ踏人ニケリ。深キ山ニ迷ヒニケレバ、浜辺ニ出ム事ヲ願ヒケリ。終ニハ人跡絶タル深キ谷ニ踏人ニケレバ、弥ヨ歎キ悲デ荆棘ヲ分ケ行ケル程ニ、一ノ平地有り。

『今昔物語集』卷三十一

〔通四国辺地僧行不知所被打成馬語〕第十四

とすれば、六十三段の女が「うばらからたちにかか」ったのはまともな道を通らなかつたからだという推量は、単純ではあるがもつともな推量である。しかし、男の出かける様子を見てあわてて家にもどろうとする女が「うばらからたち」の生えた道なき道を通つたということ、六十三段はなぜわざわざ述べる必要があつたのであるうか。女はただあわてふためいて帰っていけばそれで十分なのであつて、その途中で「うばらからたち」に難渋する必要などまづくない。また、別な見方をすれば、もし女が道なき道を帰つていったということを表わすのならば、その動作はなぜ「うばらからたちにかかるとだけしか述べられなかつたのか。道なき道に生えているのは必ずしも「うばらからたち」だけではないからである。

六十三段の物語において、女のあわてふためく様は述べられねばならない。そして、「うばらからたち」が無理のない形で意味をもちうるとすれば、「うばらからたち」はその女のあわてるという動作と直接につながるものであることが望ましい。すなわち「あわてふためた」だから「道なき道を通つた」、その結果「うばらからたちにかかつた」という間接的な形においてではなく、「あわてた」だから「うばらからたちにかかつた」という意味のつながりが期待されるのである。

「うばらからたち」とは、はたして従来の『伊勢物語』注釈や、

あるいは先に掲げた『今昔物語集』に見たような道なき野原や深山幽谷にしかないものだろうか。実はそうではないのであつて、古くから「うばらからたち」にはもつと人間の生活に親しい別な一面があつたのである。時代は著しく下るが、「うばらからたち」を考へるにあつて、次のような記事は有益である。

○濠上ノ枳殼

予少年ノ時、上州高崎ヲ過ギテ、濠上ニ枳棘ノ屏アルヲ見ル。コノ物古クアル事ナリ。周礼ノ掌固ニ、樹渠之固。トアル註ニ、樹謂枳棘之属有棘者一也。トアリ。疎ニ、樹渠者。非直溝池有樹。兼其余渠上亦有樹也。ト見エタリ。江戸天沢寺モ枳殼ヲ以テ囿トス。(以下略) (小宮山昌秀『護草小言』)

○臭橋子

「カラタチ」を枳殼と呼び作すも、全く訛称にあらず。陳飛霞幼々集成曰。枳殼鮮者更妙。臭橋子は也。樹名鉄離也。多刺而鞭。人家園壘多植之。以禦宵人者。此説を見れば、彼の地にても、園中には宵人入ると見えて、此木を以て籬とす。

(佐藤成裕『中陵漫録』)

古来の『伊勢物語』注釈ではまったく顧られることはなかつたけれども、「からたち」にははやく中国において、また日本においても生垣、籬としての用途があつた。「枳落」、「枳籬」の語がそれであり、平安朝の詩文にも散見する。

松羅任土枕江渭。

明月春風不失期。

枳落蕭疎瞻望遠。

沙堤委曲步行遲。

これは「菅家文章」卷二に収める「園池晚眺」と題する七言律詩の一節であるが、『本朝無題詩』卷二にも「人家有来客。休息于新樹之下。枳落花開。紫藤拂池」という屏風絵を詠んだ藤原周光の七律が見える。

清泉白石地形幽。

来客偶然税駕留。

枳落花間尋我入。

林庭風處待君遊。(以下略)

『伊勢物語』六十三段の「うばらからたち」は、道なき道を通ったからだといったたぐいの理屈を抜きにして、このような「からたち」の生垣と解するのが、もっとも自然な受け取り方ではあるまいか。そして、このように解するとき、その「うばらからたち」は、六十三段の女の行動とほとんど無理のない形でうまくかみあうものとなるであろう。

「うばらからたちにかか」る前、女は何をしていたか。男の家へ行って「かいまみ」をしていたのである。物語本文にはそれがどのような形での「かいまみ」であったかは一言も述べられていない。だが、同じ段に「からたち」が出て来ればそれは言わずともしれたこと、当然「からたち」の生垣からの「かいまみ」であったはずである。その「かいまみ」のさなか、女は男が出かけようとするのを見て、あわてて自分の家へ引き返そうとする。女が「うばらからたちにかか」ったのは、その時ではなかったか。「うばらからたちにかか」りて」という表現はその「かかる」という事態の因果関係を今ひとつ明確に示さないが、「出でたつ気色を見て、うばらからたちにかか」りて」という語気には、右のような解釈の余地も十分あると思う。

ところで、「うばらからたち」をいきなり「からたち」の生垣と解するについては、少し説明を要するであろう。古来の解釈では「うばらからたち」は「うばら、からたち」、すなわち「いばらやからたち」として、複数の植物名と解してきたのであり、そのことが「いばらやからたちの生えた道なき道」という解釈を支える大きな心理的拠り所となっていたのではないかと思われる。しかし、「うばらからたち」は必ずしも二種の植物名に解さなくてもさしつかえはない。たとえば『万葉集』卷十六(三三三)には次のような例が見えるからである。

枳ノ棘原カキノトゲノハ 倉持立クラマツタテ 屎遠麻礼クノトマシ 櫛造刀自シヅメノタガ

「枳ノ棘原」とは「からたちのいばら」であり、こういう言い方があるとすれば、「うばらからたち」にも「いばらだらけのからたち」という意味があっても一向おかしくはない。というよりも、「うばらからたち」には、むしろそう解すべきだと思われる用例が他に見出されるのである。

『枕草子』「名おそろしきもの」の段に「いきすだま、くちなはいちご、鬼わらび、鬼ところ」などに並べて「う(む)ばらからたち」が挙げられている。ただし、諸本により表記もまちまちであり、また、それに対する今日の解釈も一様ではない。

三卷本(第一類) むはら からたち⑤ 富岡本①

三卷本(第二類) むばら からたち⑥ (大東急記念文庫本)

能因本 むはらからたち⑦ (学習院大学本)

前田本 うはら からたち

堺本 からたちのむばら⑧ (田中重太郎氏蔵本)

からたちのむはら⑨ (京都大学文学部蔵本)

今日、『枕草子』諸伝本中の最善本と見なされている三卷本第一類が「むはら からたち」となっているのは、単純に従うことはできない。萩谷朴『枕草子解環』は「からたち」の本文を「唐竹割りの恐ろしさ」を意味するものとして、その本文を採るが、説得性に乏しい。それよりも問題なのは、三卷本第一類をはじめ、第二類本、前田本において、「む(う)はらからたち(け)」が「む(う)はらからたち(け)」の二語を示すものとして表記されている点である。なかんずく鎌倉中期を下らざる現存『枕草子』伝本中最古の前田本にそうあるということは、「む(う)ばらからたち」を二語と見なす解が、相当古くからあったことをうかがわせる。そしてその大勢に牽かれてであろうか、「むはらからたち」と明らかに一語に表記されている学習院大学蔵(三条西家旧蔵)能因本の本文も、今日の注釈では「むばら。からたち」と二語に分けられており(日本古典文学全集『枕草子』)、さらに、たとえば右に記した田中重太郎氏蔵本、京都大学文学部蔵本では明らかに「からだちのむばら」、「からたちのむばら」と、これまた一語に書かれている堺本の本文も、「からたち。のむばら(野次)」と読まれているのである(古典文庫『堺本枕草子』)。しかし能因本中の善本と目される学習院大学本における「むはらからたち」という一語表記の意味はもう少し慎重な検討を要するであろう。また、堺本の読み方にも疑問は残る。すなわち、もし堺本の本来の形が「からたち。のむばら」であるとすれば、それは、他本の「む(う)ばら。からたち」の順序を入れ換えたもの、と考えられる。とすれば、全部とはいわぬまでもせめて一本くらいは、「からたち。のむばら」ではなく「からたち。むばら」という本文を持つ堺本があってもよいはずではないか。ところが、『校

本枕草子』によって検しうる十本に及ぶ堺本伝本はすべて「からたちのむばら」となっているのである。もちろん、現存堺本の祖本が、「む(う)ばら」を「のむ(う)ばら」に改変し、以下諸本にその形が伝えられた、という想定もできないことはない。だが、この場合、いまだ平安時代の用例が報告されていない「のむばら」なる語をしいて認めるよりも、すでに『万葉集』に用例の存する(前掲、卷十六・三八三「枳棘原」)「からたちのむばら」に従って、それで一語と見る方が、はるかに穩当であろう。つまり、堺本の祖本が「む(う)ばらからたち」をわかりやすく「からたちのむばら」に改めたと想定するのである。

しかしながら、この堺本の改定は実に拙劣な改訂だといわなければならない。『枕草子』の著者が「名おそろしきもの」として挙げた「む(う)ばらからたち」の、その「名」としてのおどろおどろしさ、「からたちのむばら」という分析的な形に変えられることによつて半減してしまうからである。この種のわかりやすく改めることによつてかえって原文の香気を霧散させてしまうような改訂は、堺本の得意とする所であった。だが、この拙劣な改訂は、「む(う)ばらからたち」が一語として解しうる語であることを示す点で貴重である。これは、さきに触れた学習院大学本の「むはらからたち」という一語表記と並んで、「む(う)ばら。からたち」という今日の『枕草子』注釈の大勢に見なおしを迫る根拠たりうるであろう。

「からたちのむばら」という堺本本文の形が「名おそろしきもの」としての迫力を欠くとすれば、「む(う)ばら。からたち」と二語に分断された三卷本や前田本の形もまた然りである。「むばらからたち」という複合こそが、実物のおそろしさもさることながら、とり



わけ「名」の「おそろしさ」を表わしえているのだと考えたい。この「うばらからたち」を一語として読むべきことは、実ははやく岩崎美隆『枕草子枉園抄』によって唱えられていた問題であった。

うばらからたちはつゞけて讀む方しかるべし。うばらとからたちと二つにはあらじ。伊物に、うばらからたちともしらず、はしりまどひて、又萬葉十六に、からたちのうばらかりそけ倉たてむくそとほくまれくしつくる刀自、など見えたり。

『伊勢物語』の「うばらからたち」が一語であることを前提とした美隆の考証は、手続きとしては不備のそしりを免れないが、「うばらからたち」という語に対する彼の慧眼は敬服に値する。

### 注

(1) 『在外奈良絵本』(角川書店刊)所収。

(2) 男だけではなく、女にとってもこのような意味での「わらは」が必要であったことは、『伊勢物語』六十九段「月のおぼろなるに、ちひさきわらはをさきに立てて、人立てり」から窺える。

(3) 『日本随筆大成』第二期十九卷所収。

(4) 『日本随筆大成』第三期三卷所収。

(5) 『菅家文庫』卷二には他に「春日過丞相家門」と題する七言絶句あり、その中に「枳棘花」が見える。

除目明朝丞相家 無人無馬復無車

況平一日薨已後 門下應看枳棘花

第四句、「日本古典文学大系」頭注は、「門のほとりに、からたちやいはらの花をみるのがふさわしいほどに、荒れはてて行くの意」と、「枳棘花」をただちに荒廢の象徴と解するかに見えるが、この「枳棘花」も、もとは門前に生垣として植えられていたものと考える余地はないであ

ろうか。

(6) 『陽明叢書』所収。

(7) 『校本枕冊子』附卷所収。

(8) 日本古典文学会刊。

(9) 笠間影印叢刊所収。

(10) 笠間影印叢刊所収。

(11) 国文註釈叢書所収。